

三芳町  
10の魅力  
...  
歴史・伝統  
History and Tradition



町には、江戸時代の開拓地割景観を今に伝える県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」をはじめ33か所の遺跡(埋蔵文化財包蔵地)、古文書などの歴史資料、民具や伝統芸能などの民俗文化財が数多く残されています。

In terms of cultural assets, the town is home to 33 ruins (land that holds buried cultural properties) including the prefecture-designated historic site "Santomi Kaitaku Chiwari Iseki," the remains of groundbreaking work in the Santomi area, which appraises us in the present of landscape of settlements in the Edo period. In addition, the town holds many historical materials such as ancient documents as well as folk cultural properties such as folkcraft articles and traditional performing arts.

歴史

三芳町は、武蔵野の美しい雑木林と、整然と区画された畑を残す町として広く知られています。この姿は大昔からの景観だったのでしようか。三芳町域は、関東ローム層と呼ばれる火山灰が厚く堆積した台地が占め、町の東部に柳瀬川をはじめとする幾つかの小河川が流れるものの、ほとんどが平坦で水に乏しい痩せた土地でした。しかし、三芳に暮らした先人たちは長い年月をかけて、知恵と工夫を凝らしながら今の我が町を築きあげてきたのです。

【原始・古代】

三芳町の曙は約3万5千年前の旧石器時代にさかのぼることが、藤久保東遺跡や藤久保東第二遺跡から発掘された石器によつて明らかにされています。また、藤久保の俣整遺跡からは縄文時代の竪穴住居跡や土器が、竹間沢の本村南遺跡からは弥生時代の方形周溝墓などが発掘され、当時の生活の様子を窺い知ることが出来ます。また、平安時代になると、みよし台一帯には瓦や壺などを焼く窯が築かれました。ここで焼かれた器の中には「福鷹」と刻まれたものもあり、この町内最古の文字で表わされた人物は、当時のこの地方の有力者と考えられます。



【中世・近世】

鎌倉時代から室町・戦国時代の武蔵野は見渡す限りの原野でした。鎌倉武士が馬を走らせたとされる鎌倉街道が藤久保と竹間沢にあり、竹間沢には中世を思い起こ

【近代・現代】

明治22年(1889)4月1日の町村制施行により、上富村、北永井村、藤久保村、竹間沢村が合併して三芳村が誕生。以来、長期間にわたり純農村地帯として歩んできましたが、昭和40年代から高度経済成長とともに首都近郊のベッドタウンとして、また、首都圏の流通基地としてめざましい変貌を遂げ、人口も急増し、昭和45年(1970)に町制を施行、現在は農工商のバランスのとれた町として今日に至っています。



伝統

「三富開拓地割遺跡」

江戸時代の元禄年間、川越藩により開拓が行われた三富新田。三富の開拓は、幅六間(約11m)の道を縦横に開くことから始められ、この道の両側に間口約72m、奥行約67.5m一軒あたり約5haの短冊状の土地が配分されました。二軒分の屋敷割り、道に面した部分を屋敷地とし、その次に耕作地、最奥を平地林としました。

■屋敷地

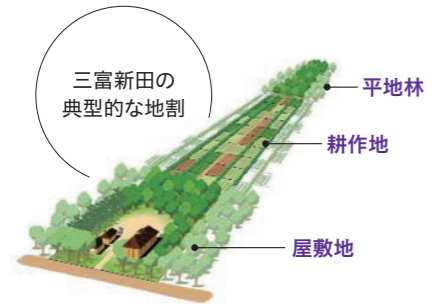
屋敷の周りには、防風林を兼ねて竹・カシ・ケヤキなどが植えられました。平地林とともに屋敷林を育てたことにより、保水力が上がったと考えられています。

■耕作地

一日の耕作の目安となる、5畝単位に区切られています。乾燥した畑の土は、春と冬の季節風により巻き上げられてしまうことがあります。そこで、畑の境に茶の木を植えて風を防ぎました。この茶は「畦畔茶」として春先の重要な作物となりました。

■平地林(雑木林)

薪炭材としての価値が高く、葉が堆肥として利用しやすいナラやコナラの木が選ばれて代々の農家が育ててきました。冬に落ち葉を掃き集めて一年以上かけて堆肥にし、それを畑に投入して土を



「武蔵野の落ち葉堆肥農法」を支える道具たち

落ち葉掃きで使用する「クマデ」、集めた落ち葉を入れる大きなかごを「ハチホンバサミ」と呼びます。クマデは落ち葉が掃きやすいように弾力性と爪のカーブが工夫されています。

ハチホンバサミに詰め込んだ落ち葉は、乾燥状態で重さは約70kg。材料にはマダケを使い、耐久性に優れた道具たちも江戸時代から現代に受け継がれています。

ハチホンバサミ



「落ち葉のもう一つの活用」苗床

落ち葉は堆肥として使用されるだけでなく、サツマイモの苗床用の醸熱材として多量に使用されています。熱帯地方原産のサツマイモを早く発芽させて畑に定植させるため、落ち葉の発酵熱を利用してサツマイモの苗を栽培する落ち葉温床が広く用いられ、現代に伝わっています。



みよしの歴史・文化を学ぶ、もっと町が好きになる 歴史民俗資料館

常設展示室では、原始・古代から近世までの時代を追った展示と産業(サツマイモ)・教育(寺子屋)・芸能(竹間沢車人形)に関する展示が行われています。特別展示室兼ギャラリーでは、テーマを絞った企画展や特別展、季節に合わせた歳時記展示などを行っています。また、ちよつとした工作や昔の暮らしを体験できる土曜体験教室なども開かれています。資料館の屋外展示として旧池上家住宅が公開されていますので、訪れた際にはあわせてお立ち寄りください。私たちの住む三芳町。先人が長い年月を費やして築き上げた三芳の歴史を、ぜひ資料館で触れてみてください。(入館無料)

⑧ 竹間沢 877  
⑨ 049-25816055  
⑩ 月曜・祝日・年末年始



I♥MIYOSHI

武蔵野の落ち葉堆肥農法 実践農業者 阿部農園 阿部 多喜子さん



サツマイモの収穫が終わった1~2月に落ち葉掃きをします。真冬の重労働は大変ですが、翌年、美味しいサツマイモを作るために落ち葉堆肥は欠かせないですし、お客さんからの「美味しかったよ」という声は何よりの励みです。「武蔵野の落ち葉堆肥農法」を続けるには、平地林を守り続ける必要があります。子や孫の世代に継承できるよう、これからも美味しいサツマイモをたくさんの人に届けていきたいです。